

エコたま グリーン NEWS



多摩市民環境会議機関紙 第110号(通巻第170号)
2013年10月17日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax042-376-4572(事務局員は常
駐しておりません) e-mail qqh43td@train.ocn.ne.jp
URL http://ecomeetingtama.bjog.ocn.ne.jp

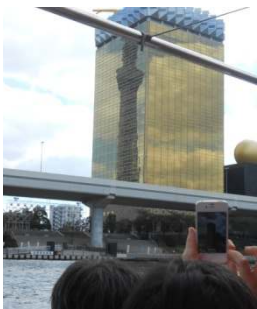
江戸の形跡を覗く「東京川ウォッチング」(下)



清洲橋から見た東京スカイツリー

橋という意味で「両国橋」と改名されたのだという。その下流に架けられた橋だから新大橋。

ちょうど大相撲の千秋楽を迎えた両国国技館を右に見て、やはり相撲に関係のあった蔵前橋に向かう。このあたりの左側の川岸にはずっと「なまこ壁」が続いている。これも江戸の風情の再現だが、蔵前橋の欄干が黄色に塗られている理由とは、江戸時代にここに幕府の米蔵が置かれていたため、稲穂をイメージしての色なのとか。いまは旧蔵前国技館はなくなっているが、東京電力の大きな変電所が目に入る。



アサヒビール本社に映る

さらに楽しいのは、そのミラースクリーンに東京スカイツリーが反射し、きれいに映し出されること。ここでは写真を撮りやすいように船が停船してくれる。ここを過ぎれば同ツリーが目の前に見えるようになるが、船はツリーの近くを流れる北十間川には入らず(入れず)、隅田川からの見物のみ。

そして言問橋を過ぎたところでUターンし、船宿のある浅草橋の神田川に戻っていった。この間、2時間10分。小名木川水門で時間を食うと2時間半ぐらいになることもあったか。

いずれにしても、川面から上を見上げながらの濃

小名木川から隅田川に戻ると、船はどんどん上流へ進む。すぐに新大橋、首都高7号線の橋、両国橋とたどっていく。両国橋は昔は「大橋」

と呼ばれていたそうだが、その後、武蔵の国と下総の国を結ぶ

厩(うまや)橋は橋の西側に幕府の厩があったことからの命名。つぎの駒形橋も橋の脇に馬頭観音を祀る駒形堂があったことに由来する。

吾妻橋を過ぎると、右側にアサヒビールの本社が見えてくる。“炎のオブジェ”と呼ばれる金色のモニュメントもあるが、特徴的なのはビルの本体が黄色いビール色で上部が泡の格好の構造物になっていること。まるでビル全体が四角いジョッキのようだ。



写真は粋人丸

密な、そして江戸時代の名残を各所で感じながらの小クルーズ。非日常的なこういった時間は初めての体験で、自分の好奇心を十分に満足させてくれる“小さな旅”だった。

問合せ:三浦屋 www.funayado-miuraya.co.jp

第2回セミナーのテーマは「水辺の環境」

9月から始まった今期の環境学習セミナーは、10月6日に第2回目を迎え、今回のテーマは「水辺の楽校の活動」。ふだん水辺の楽校がどんな活動を行っているのか。フィールドワークとして、実際に活動を行っている大栗川と多摩川の合流点付近で川のなかに入り「ガサガサ」(生物採集)を行ってもらった。

講師は多摩川源流研究所(山梨県小菅村)の鈴木一聡さんと国際水産資源研究所の西田一也さん。

川に入る前に、鈴木講師から多摩川の源流域である小菅村の話や、小菅村に棲む動物の話や頭骨、毛皮などの紹介があった。

前日は小雨が降り続いたものの、この日は曇りから晴れと天気は問題なし。受講者の参加は女性7名、男性8名の計15名とややさびしかったが、それでもライフジャケットに身を包み、意を決して川のなかに入っていく。ここから眺める聖蹟桜ヶ丘方面の景色は、見慣れぬ新鮮さがあるし、前日の雨も水量には影響していない。

まず、西田講師が岸辺の草の生えているところに網を置き、その上流部から足でガサガサと周辺をかいて生物を網のなかに追い込むやり方を紹介。このあとは2~3人ずつだったり単独で、受講者自身がガサガサを行った。

最初はエビばかりよく網に入ったが、そのうち小魚やヤゴなども入るようになり、参加者は夢中でガサガサにのめり込む。しかし、何人かは川に入ることをためらい、岸辺から参加者の動静を見守っていた。2歳の女の子を体の前にだっこして受講している若いママもそのなかに。

水草の生えている岸から、少しでも中流側になると急に深くなるため、岸辺に近いところか対岸の岸辺でないと活動できない。こうして、合流点の手前から交通公園の近くまで移動しつつガサガサを終える。採集した生物を西田講師がより分け、1個体ずつ透明な樹脂の容器に移し、解説したあと回覧。結果はカワムツ、オイカワ、アブラハヤ、タモロコ、ミナミヌマエビ、コヤマトンボのヤゴ、生まれたばかりのアメリカザリガニなど14種の水生生物が収集されたことがわかった。受講者はどちらかといえば年配の人が多いが、それでも久しぶりに入った川での活動にすっかり少年・少女時代がよみがえったようだった。



川に入る前に注意事項の説明



とれた生物に興味津津の受講者



盛況！“エレキセンター”のエネカフェ



会場には20人近い人が開かれ、多摩の各地域からエネルギーの今後に関心をもつ20人近い若い人が参集し、熱心に聞き入るなど盛況だった。

最初が多摩エネ協理事の片桐徹也さんが、来年に一般財団法人設立をめざして取り組む「多摩地域創造基金」というものの構想について話した。これは多摩地域が今後発展するのにいろいろな好条件を備えているので、地域をさらに創造するための基金をつくらうというもの。



林理事のフォーラム参加報告 分科会で事例報告を行った林久美子理事の参加報告。

3番目は奥多摩で小水力発電の実証実験を行っている濱田幸一さん（エネ協会会員）の映像紹介。これは半円形の鉄製の筒に螺旋形のプロペラのようなものの軸を固定して設置し、斜め上から水を流すとプロペラがよく回転し、その力で発電するというアイデア機。10月26日に青梅線の鳩ノ巣駅近くで一般公開を行うとのこと。

また、日野市でも市民発電所の計画が持ち上がっているなど、この日は青梅、八王子、日野からの参加者があり、情報交換を行った。これも、三多摩では多摩エネ協が市民発電所を先駆けて実現したことから、センターのような存在になっている証なのかもしれない。

「生ごみ入れません！袋」最初の配布に80人



ごみ対策課が市民に対して行う「生ごみ入れません！袋」の今年度後期分の配布が、10月6日午後のひじり館から始まった。すでに生ごみを自家処

理している人の更新と、これからそれをしようと申し込む人の両方が対象。午後1時からひじり館ホールで磯貝浩二担当課長による「ごみは資源」の講演も行われたが、午後3時30分から5時30分までのあいだ、申請が受け付けられた。

無料で「燃やせるごみ」が出せる同袋の人気は高く、会場前には時間前から15人～20人の列ができていた。同課長やごみ減量担当職員、生ごみリサイクルサポーターら4人が対応に当たったが、ひっきりなしに更新や申し込みにくる市民に休みなしで対応。10リットルの袋20枚が渡されるのだが、関心が高く全部で80人が登録した。

国と東電、放射能と闘うことを決意した“ベコ屋”(2)

3月18日、東京電力の本社前に行くと、相変わらず警備は厳重だったが、警備員に「自分は福島から来た。こ

のままでは牛が全滅してしまう」というなり、自分は感極まって泣きじゃくり始めた。その姿を見た警備員が「憐れみ」を感じたのか「福島」の牛を世話する吉沢さん効力か、社内に取り次いでくれた。けっきょく東電の門は開かれ、なかの応接室に通された。



総務部の主任という人が出てきて対話をした。「たぶん牛は全部死ぬだろう。絶対に損害賠償の訴訟は起こす。東電は原発をコントロールできなくて逃げようとしているようだが、絶対に逃げるな。あんたたちがつくった原発じゃないか。自衛隊の人たちだってあれだけがんばっているのに、ふざけるな。オレだったらホースを持って建屋に飛び込んでいくぞ」と。

最後のころ、総務氏はむせび泣いていた。こうして、自分の思いは東電に伝わったと思った。

つぎに農林水産省に行き、「国として牛たちを生きさせる手立てを考えてほしい」と懇願し、農水省も一度は牛の移動を考えていたことがわかった。経済産業省内の原子力保安院にも行った。「国が安全といていた原発が爆発した。オレは3号機の爆発音を聞いた。プルトニウムが福島に飛び散っている。あなたたちのやっていることは『危険不安院』じゃないか。ふざけるな」といった。

もう一つ、当時の枝野幸男官房長官がよく「原発の事象」という評論家のような言葉を使い発言していた。まるで自分には責任がないような顔をして。これも許せなかったもので、枝野長官と面会し話をしたかった。

警備の厳重な首相官邸前で面会を申し込むと、これも警官が親切に取り次いでくれたのだが、返ってきた返事は「アポなしではだめだ。後日出直してこい」だった。

「事象」がなんなんだって。責任を感じろよ。

1週間後、二本松の社長の家に帰った。牛たちが全滅するのは目に見えていたので、3月18日に社長自身が泣きながら牛舎の門をあけたそうだ。餓死だけはさせたくない。そして3月23日からもやし工場の搾りかすをもらい、トラックでそれを牛舎に運んだ。放射線量が高いから、さっと置いてさっと帰るといような方法で。

近所の農家の牛舎も見て回った。停電で水は出ない。世話する人もいない。エサもない。牛たちがつながれたまま死んでいく地獄のような光景を、あちこちの牛舎で泣きながら見た。これによって「こんなことをしていいのだろうか！」と逆のスイッチが入った。

とにかく牛たちを生かすんだ。原発から20km圏内。早期警戒区域ということで、道路は全部封鎖されていた。

「許可証のない者は逮捕するぞ」「罰金は10万円」ということだった。といっても許可証は出してくれないので、警官の詰めていない山のなかのルートを使って牧場にエサを届けていた。しかし、パトロールの警官に見つかって署まで連行され、始末書を書かされたこともあった。

でも、オレたちは牛を見捨てないよと、エサ運びを続けた。その行動が宮城県の「河北新報」紙に大きな記事で報道された。そしてそれが枝野さんにも伝わった。彼はNHKのニュースで「警戒区域にしたのに農家でエサを運んでいる者がいる。よくない」と。(次号につづく)